

ご入学 ご進級 おめでとうございます



はじめまして。4月から図書館に勤務することになりました三上かおりです。
みなさんと、本との出会いを大切に、司書として勤しみたいと思っています。
どうぞよろしくお願いいたします。

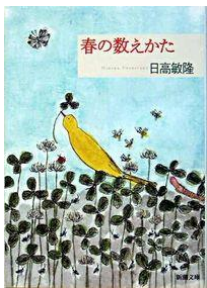
「読書」の本というと小説を思い浮かべる人が多いかと思いますが、図書館には歴史や自然、音楽やスポーツなど、学習や生活に関係のある本もたくさんあります。手にした本がきっかけになって別の本や考え方につながっていったことを思い出し、「司書の部屋」では“つながる”をテーマに、私がつながっていった本の紹介をさせていただこうと思います。みなさんも「つながった本」があれば教えてください。

<教科書から春へつながった本>

4月になり新しい教科書を開くと、いよいよ始まったなという気持ちになるのではないのでしょうか。ずいぶん昔になりますが、中学校に入学して間もない頃、国語の教科書で見つけた、今でも思い出す文章があります。染織、その中でも桜染めのことに書かれたもので「よりやわらかな美しい桜色に染めるためには、冬の山桜の根を使って染める。桜の木は寒さの中で、春の色をつくり出している」というような内容だったと思います。記憶違いもあるかもしれませんが、この文章を読んだからは、毎年花が咲く前の桜の木を見ると、木全体を使って美しい花を咲かせるための色をつくらしている、力強いエネルギーを感じるようになりました。(そこから草木染めにもつながっていったのですが、それはまた別の時に紹介させていただきます)

学校に初めて訪れたとき、大きな桜の木に目がとまりました。神戸にも桜の名所はいくつかありますが、桜の開花宣言はニュースになるほど関心が高く、心待ちにしている人も多いと思います。桜に限らず、植物や生きものは春になれば花を咲かせ活動を始めますが、雪の多い年や暖冬の年もある中で、天気予報も知らない動植物は毎年ちゃんと春を見極めています。不思議に思っていました、どうやって春がきたことを知るのか解決と同時に、自然の不思議によりつながった本を紹介します。

『春の数えかた』^{ひだみとしか} 日高敏隆著 新潮文庫 2005年



「春になると咲く桜の花も、実は前年の夏に花の芽を作り、冬の間につぼみをふくらませ始めている」(「カタクリとギフチョウ」)を読んだとき、私が感じていた早春の桜の力強さは、花を咲かせる準備がすっかり整い、本番間近だからなのではと解釈しました。桜はとも用意周到なのですね。

また、同じ種類の花が同じ高さで、同じ時期に咲く理由と、昆虫との切っても切れない関係や、今世界中で取り組まれているSDGsに関係のある環境問題など、人間が自然と共生していくことなどにもふれられています。

著者の日高敏隆氏は日本を代表する動物行動学者でしたが2009年に亡くなられました。

学ぶことに対して日高氏の謙虚な^{ほんきよ}お人柄が感じられるエッセイ集です。

気になったところから読めます。



2022.4.8 三上

